

趣旨で、その建立を始めた。

このように南北朝時代を背景に、宇目郷に住みついた岡田一族によって、二基の宝塔が造立された。その内の一基は利生塔として北朝年号と刻み、別の一基は宮方のために建立された。

貞和五年は、後醍醐天皇が吉野の行宮で崩御されて十年目、天皇のご冥福をお祈りすると共に、南朝方のために造立されたものと思う。

また塩見園を中心に一基位の所に宮野・宮園・宮が瀬などの地名もあり、懐良親王の仮宮もこの付近にあったものと推定する。

(参考図書) 日本史・南北朝史論・大分県郷土史料集成

高千穂太平記

〔付記〕

塩見園の宝塔について

宇目町塩見園の一角に、均衡のよくとれた美しい二基の宝塔がある。(前記利生塔、前ヘジスケツ子風の塔) 刻銘は「貞和五年己丑十月二十八日」と北朝の年号が刻まれている。

材質は凝灰岩で、地上から相輪中部(相輪上部と空珠は大損)まで二・五メートル。方形の基壇の上に基礎を建て、その基礎の四面には、見事な格狭間が彫られている。格狭間の曲線は左右に強く張り出しており、肩のあたりからの曲線は、ゆるくふくらみをもち、おおらかななかに、上部の重さをささえる力強さが表われている。

塔身は高さ五十三メートル、径六十一メートル、雄大で安定感がある。笠石の軒の厚さ、反り、軒両端の縁など、時代をよく反映している。

露盤・伏鉢・請花は特に良い。しかし相輪中部から上を欠損しているのがおしい。二基ともである。

この宝塔の見どころは、基壇上部四面に彫られた反り施である。全体筋に彫りは深く、各蓮弁の形に礼味をもたせ、各弁を両側から押し上げるように囲んで中央に引上げるように、よくまとめている。削り方もいいねい、上部の重さに対して、よくバランスがとれている。

私に九州各県、あちこち随分と見学しているが、同年代の宝塔としては、この宝塔の右に出る塔はない。貴重な、見事な宝塔で、石造重要文化財である。

これだけ見てわかるように、地方作の感じが全くない。きっと京都か鎌倉あたりから派遣された、名ある石工によって刻まれたものであると思う。

(おわり)

紹介 「数窯」のけむり

(おわり)

毛利高政による赤越焼、上久部の皿山、宇目町水ヶ谷の「水ヶ谷焼」の外、ついぞ見聞することのなかった佐伯地方に、あたかも明星の輝くように陶器を焼く新しい窯場が築かれた。それは弥生町元田の青井陶芸家、市野瀬哲郎氏の経営で、名付けて「数窯」という由。

市野瀬氏は本会市野瀬会員の会長、佐賀県に修業し、この道一途に陶芸に没頭している。そして去る正月二日、何度目かの窯を開けた由である。

去る一月八日、私は畑野浦の富高氏(会員)と元田のお宅に伺い、作品を見学する機会を得た。広い二部屋の陳列には、花瓶や茶碗がきれいに並べられ床の間や余った分は置の上にも、数十点が置かれてあった。

均整のよくとれた形、しびいした色合い、手に持ったずしりと感ずる重み、すでに火を

出来である。今後の精選による大成を祈り、

